

多様性（ダイバーシティ）…「異質」を糧に

日産自動車(株)ダイバーシティディベロップメントオフィス室長
吉丸由紀子（新制32回）



“ダイバーシティ”…今この「応用化学会報」を読んでくださっている皆様の中には“無線技術分野の受信アンテナ”をぱっと頭にうかべる方もおられると思います。Wikipediaによれば、「多様性（ダイバーシティ）とは、幅広く性質の異なるものが存在すること」として生態学や社会学の分野で使われています。現在の勤務先である日産では「持続的成長に不可欠な経営戦略であり、性別・国籍・文化・年齢・ライフスタイルといったさまざまな背景を持つ個人の考え方や価値観の違いが新たな視点・アイデアを生み出し、それがぶつかり合うことにより企業としての競争優位になる」と考えています。その専門組織の発足した2004年に着任しました。

応用化学と現在の業務とは一見つながりはないようですが、思い返してみると、逢坂先生の研究室に入れて頂いた時から異質なものとしての人生を歩んできたのかもしれないとも思えます。研究室のドアをノックした学部3年の時の光景を四半世紀たった今でもはっきりと覚えています。「この研究室は女子はダメなんだよ」と先輩が親切に言ってくれました。確かに先代の教授時代は男子学生のみでした。「まあ、いいんじゃない」という逢坂先生の一言で女性第一号として研究室での生活が始まりました。先生や院生の先輩、同級生も扱いに困ったこともあったかもしれませんが、「異物」を包容し育てていただきました。就職にあたって、男女雇用均等法以前のことでしたから「前例のない」ことだらけの中で関係者の皆様をお願いをしまくりました。当時貴重な男女同一処遇の企業であった沖電気を推薦して下さった先生や「研究所でなく、海外部門に行きたい」との無理難題を受容れ、ハイリスクを抱えながら対応してくれた関係者の皆様には本当に感謝してい

ます。

その後も日本企業の第一次グローバル時代の海外人事という、当時はメーカーでは珍しかった領域の立上げにも参画しました。この時も、メーカーにおける技術バックグラウンドがビジネスの状況の理解、社員、特にエンジニアへのサポートという観点で思いのほかベースとして役立ってきたのではないかと考えます。

その後の米国海外駐在や外資系でのコンサルタントとしての仕事、そして家族での欧州での勤務も経験することができました。現在の職務も、男性社会といわれてきた日本の自動車メーカーにおいて女性で、中途採用者でニューヨークやロンドンでの勤務経験といった多様なバックグラウンドを活かしつつ、グローバルな市場の多様なお客様のニーズに社員の多様性を活かしてより高い価値を提供すべく日々奮闘しています。

地球が“せまく”なり「国際」という言葉すらあたり前過ぎる昨今、日本においてもいよいよ多様性（ダイバーシティ）が必然になっています。母校の早稲田大学、その卒業生や在校生の皆さんと共に狭くなった地球を舞台に頑張っています。

